

南阿蘇

暖冬との予測に反し、日本海側では記録的な大雪が降った。阿蘇の冷え込みも例年になく厳しく、年賀状に書かれた「迎春」の文字がまだまだ遠く感じられた。正月のあいさつで「初春」や「新春」が使われるのは、旧暦の名残であることは学校で習って知っていたが、私たちの世代にとって旧暦はまぎしく古い慣習。存在は知っていても、感覚として身につけているものではない。一月は「春」ではなくやはり「冬」だ。しかし農村で暮らすようになってから、祖父母や周囲のお年寄りの間ではいまだに旧暦が生きていることに気づきはじめ、次第に興味を持つようになった。

吉田 愛梨

里の風

旧暦と伝統行事



絵・有働 孝昭

が最大の夜間照明だったころ、月の明るさには大きな意味があったのだろう。街灯の少ない農村では、今でもそのことが実感できる。旧暦を意識し始めてから、様々な伝統行事について「なるほど」と思う事が多くなった。旧暦では、

東アジアの農村がもつとも暇な時期、つまり春の初めの立春前後が正月になるように作ってあるという。なるほど。また、例えば七夕。旧暦の七月なら梅雨も明けけている上、七日なら半月なので天の川が良く見える。

行事につきものの植物や食べ物にも同じことが言える。七草がゆに入れる七草は、今の暦の一月ではまだそろわず、旧暦の正月ころにちょうど生えはじめるものばかりだ。桃の節句にしても、昨年わが家の桃が満開になった四月二十一日は、旧暦の三月三日だった。せめて伝統行事くらいは旧暦で祝うほうが季節を感じられるのではないかと、と夫に言つと、「今の暦の季節に合わせた祝い方に変えていくのも手じゃないか？」という意外な答えが返ってきた。例えば七草にしても、伝統的なセリやナズナに固執するのではなく、今の暦の一月にそろうものでつくればいい、というのだ。ひな祭りだって、桃でなければならぬこともないだろう、と。

古い物好きの私としては、せっかくの伝統文化を変えろということには抵抗を感じるが、なるほど、そういう考え方もあるのかと気づかされた。

(おあしす米生産者、NPO九州バイオフォーラム理事長)

